**和歌の宗教学：**

津城先生（名前が一緒の字がある）。

非常に心に染み渡る。これが異分野との交流だと思い聞きました。貴重な体験ありがとうございました。

素人ですので自然科学への取り組み方、影響について稚拙ながら「過激な」コメントをさせていただければと思います。

AIということも仰られました。非常にチャレンジングだと思いました。そういう意味で、今の世の中で今後和歌という分野はどの様に発展していくのですか？

**（身心変容として：どのように心と身体（表現型）が影響しあうか、を意識しながら、のつもりです。）**

**和歌：自然科学につながる！**

 「詩には超自然的な存在を動かす力がある」と説いている

＝＞フィードバック の例「力を入れずして天地を動かす」

個別の仕組みでなく、全体の視点の中でのそれぞれ存在の意味、関わり方こそ理解すべき「仕組み」。

＝＞誰でも実践できる。科学の万人性

＝＞我々の行為が自然に、どうつながるかを感じるきっかけ；サステイナブルの実践

我々の一つ一つの行いが自然に影響を与える

＝＞謙虚な姿勢で自然と対峙していく重要性。

＝＞観察から入る。（要素還元的でない：分子機構でない、知識偏重でない）

和歌教育の重要性？

 見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ（藤原定家）

＞新しい価値観（見方）の提示：芸術の全ての分野に通じる存在意義。問題提起。

(見えないものに注力しなさい＝＞新たな視点の提供、見えないものを「見える」様にする)

（今の科学の問題点の一つ）

だんだん良くなっているとはいえ、今のサイエンス（分子生物オンリー）は見えるものをわからない言葉で説明している部分も多々あり（それを理解したと勘違いしている）。

**和歌は面白い！**

１、権力としての和歌――ポリティックス（１）

日本人は和歌の前に平等（私は歌えないとおもっていたが。。。）

＃＃＃**小さな日本文明が、強大な中国文明に押し流されなかったのは、大和言葉で詠まれた歌の助け**であり、日本はまさしく「言霊の助くる国」だったと述べている

平易なことば＝＞万人性：芸術、科学の一側面として、かくあるべき。

 「平易なことば」で語ることのできる人、テーマこそより重要性が高い。日本独自の科学の実践への試みとしては和歌は面白い観点を与えることができる。

＝＞日本オリジナルの実践

（歌人、詩人の違いを理解すれば己は強い！）鎌田先生：詩人（アイデアマン：エッセンスの抽出力）納得。自分も私は「歌人」タイプを目指すべきか（それすら目指せるか。。。）？

２、呪力としての和歌――ポリティックス（２）

和歌を含む歌舞奏楽によって、対象（者）に「その人の魂」や「清らかな魂」が入っていくことを、折口は鎮魂の「呪術」と考えていた。

神様の言葉を初めていうとそれが心に入っていく。

「力を入れずして天地を動かす」

３、真理瞑想としての和歌――メディテイション（１）（ポリティクスの力学からの逸脱）

仏教的：これは面白かった。科学にも通じる！

西行の和歌は、「鴫立つ沢」という「一瞬のうちに消えてゆくフェノメノン」「仮」が、秋の夕暮れという「空」の中で、「羽ばたくことによって、一挙に「中」という「超越的なものの存在をあらためて自覚させ、呼び覚ます」一瞬を詠ったものである。

三**諦：**

「すべての存在は空無なものであるとする空**諦**、すべての事象は因縁によって存在する仮のものとする仮**諦**(けたい)、すべての存在は空でも有でもなく言葉や思慮の対象を超えたものであるとする中**諦」**

定家の和歌は、しばしば批判されるような「理屈」ではなく、春のフェノメノンである「花」は「仮象の世界」、秋の「紅葉」は「空の世界の象徴」であり、「花ももみぢもなかりけり」というのは、「「仮」でもなく「空」でもない」ということ、そこに、「浦の苫屋」という「機」によって喚起され、「出現するのが、「仮」と「空」をはらんだ「中」の宇宙」としての「秋の夕暮れ」である。

「三諦」の思想：仏教的な科学感

（私の理解：真実というのはどこかに隠れている（みえにくい）ものである。それを平易に説明できるようにするのが、この和歌の観点を踏まえて各人が実践すべき次のステップ）

＝＞アンチ西洋輸入研究への実践

＝＞和歌の側面。短い中でダイナミックに視点が変化。

（形而上学的＝論理を超えた：私の理解は正しい？）

それを形而上学的で終わりにしない様にするのが「科学」。その意味で和歌（芸術）と科学の相互作用が意義あるもの（あらたな考え方の提供）。

仏教的真理を前提・体現したうえで、フェノメノンそのものを詠むものとなる

＝＞自然観察から新たな観点を提示できるきっかけ。

「形而上学的なストラクチャ」の瞑想である

＃上記との対峙。ただし、お互いに密接に関わるものとして、

**４、自然観照としての和歌――メディテイション（２）**

専門家もほとんど自覚していないことだが、「叙景詩」というキーワードは、「抒情詩」「叙事詩」がlyric、epicの翻訳語であるのとは事情が異なり、それら翻訳語との連想で作られた、近代日本のオリジナルのタームである。＝＞個人的にびっくり

ヨーロッパで発達しなかった叙景歌が、日本では早くから作られ、「日本の歌の中で、最も眼を着けなければならぬもの」となったのは、なぜだろうか。

（瞑想？？？といいましたっけ？）

具体的な姿かたちを「歌ってゐる内に」、「外界と内界との結合」「自然内界との結合」が実現する、そこから「自然の核心」に迫る、というものである。

＞＞他方、瞑想的叙景的な釈迢空短歌を私の言葉遣いで説明すれば、身心の内外を濃厚な「水」や「音」（的なもの）で満たすことで、外界と内界を融合させ、結果として、身心の動揺や不安定、内外の不安定や非対称を、克服する営みである

叙景詩こそ和歌で注目すべき（（目でなく）音（聴覚）という観点から叙景、自然の核心に迫る。違うアプローチをとることで本質へと迫る）

万葉集：良い歌は即物的（主観を廃して）な歌

和歌を詠むことを使命とした中世貴族について、その生活は文芸に捧げられた「数寄の生活」であり、「花鳥風月を愛でる風流」の実感に即す態度が極まった頂点に、『玉葉』『風雅』の「一層念を入れ、一層細かく自然を見る」歌が生まれた、という指摘がある。

「ありきたりの風物を、つねに天象の変化と結びつけて眺める……多くは模糊たる水蒸気のへだての中から見るか、雲霧の流れに一部はかくれ、一部は現われたものを見る……光線の中で陰影とともに見る……動きやすい天象が特に印象ぶかい状態にある一瞬をとらえて味わう」という、観照の冒険であった

**今後の和歌と他分野の折衷点**

津城先生の言葉でいえば「アトモスケープ」を詠んだ歌である。

**例外の項目**

５、和歌の詩学プロパー（心と体のメディテーション）

すべての和歌が、二つのポリティックスと二つのメディテイションの枠に収まるわけではなく、むしろ、言うまでもなく、そこから外れるものが多い。

ときに安易な技法として批判される「本歌取り」について、この技法が、もとの歌の世界との「ダブルイメージ」を利用して「多重性」「重層性」を作り出すことで、集団的な連歌の世界につらなり、その「演劇的想像力」が能の演劇のベースになった、という捉え方

これは和歌に限らず、また日本の詩歌に限らず、世界文学史、さらには文化史に共通の、伝統的、基本的な技法であるが、先行作品をつねに念頭におき、それを翻案することが、ヨーロッパ詩歌で技法としてはっきり自覚されたのは、二〇世紀のモダニズム詩において、しかも日本の短詩や能の影響によるものであった、という指摘がある

エッセンスの抽出法としての和歌？？？＜＝様々な文化の交雑。

遺伝子、遺伝子は枠組み？

でもどういう枠組みでもエピジェネティクス的に変換できる

環境の影響（そういう意味で教育：考えることの重要性：考えるというのは感じることの延長）

解析という考え方、なんだろう？という不思議から考える（０からの考えの構築）